

創立50周年 記念誌



ベルスキークラブ



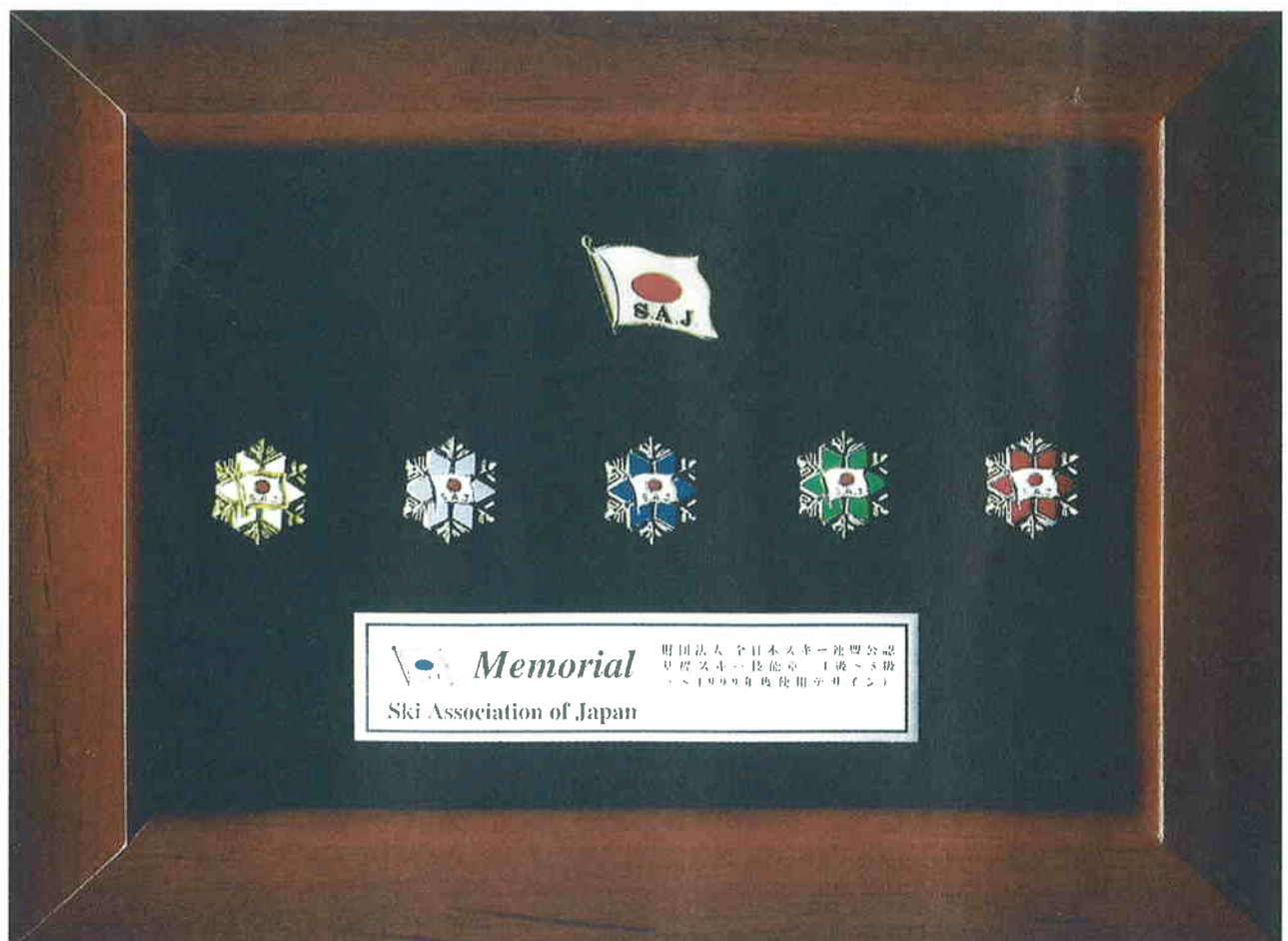






クラブワッペン・クラブ旗







お、妙高の峯よ（お、ジクラリーの峯よ 賛歌）

一、青くそびゆる暁の山

今くれないに お、妙高の峯よ

三、大雪原を行くスキーヤーの

憧れの地は お、妙高の峯よ

三、去るも来たるも

仰ぐ姿は 心ひとし助
お、妙高の峯よ

四、ウラーノ神の住家とみまもりて

靈気あふるゝ お、妙高の峯よ

栗林一路作詞

発刊によせて



ベルスキークラブ
会長 小泉章五

ベルスキークラブが誕生して50年、半世紀におよぶ、その節目を迎えることができました。ひとえにスキースポーツ発展のために尽力いただいた歴代会長はじめ、多くの諸先輩の方々の努力と熱意の賜物であり、併せて関係各位のご指導、ご鞭撻のお陰と深く敬意と感謝を申し上げる次第です。

クラブの歴史を振り返るとき、燕温泉でのスキースクールを抜きには語れず、今なお活動の要としてスキー技術の練磨に励んでおります。

妙高山の山ふところ、燕温泉はまさに深雪のメッカであり、ベルスキークラブを生み、育ててくれた”道場”であると共に、クラブの歴史そのものだと確信をしています。

深雪に何度も挑みながら腕を磨き、疲れた体を温泉で癒し、酒を飲み交わして技術論に時間も忘れての一夜を過ごす。

多くのクラブ員が歩んだ道であったように思っています。

第2回のスキースクール以来、44年に亘り宮沢一英先生はじめ、燕アルペンスキー学校の諸先生方の熱心なご指導を仰ぎ、全日本のスキー技術を伝授いただいたことは感謝の他ありません。

私事ではありますが、昭和46年の第9回のスキースクールに初めて燕の地に足を踏み入れました。

何ひとつ知識のないまま夜行列車に揺られ、山奥深い、ひっそりとしたスキー場、その寒さと雪の多さに驚き、まさに”えらい所に来たな”と感じたものでした。

それ以来37年、一年も欠かすことなく続けてこれたのも、燕温泉の魔力？のせいかなと思っています。

そんな中、平成7年1月17日5時46分に起きた阪神淡路大震災は、その年から当日中に帰宅するという日程の変更が、大混乱を回避できた運命的な出来事であったように思います。

どうすることもできず、ただ呆然と列車内、或いは駅ホームに立ち尽くす姿を想像しただけで本当に”助かった”としか言いようのない出来事でした。

奈良県スキー連盟から兵庫に移籍して30年、有資格者も十数名を数え、スキー指導者を目指

すスキー愛好者が続いていることが何よりも心強い限りです。

ただ、悔やまれるのは、今年の夏に急逝された佐野初代会長と共に喜び、祝うことができないことであり、冥福をお祈りすると共に、天国から見守り続けてほしいと願っております。最後になりますが、記念誌の発刊にあたり、諸先輩やお世話になった方々からお祝いのお言葉を頂戴しましたことに心より感謝を申し上げますと共に、これから60周年、70周年を目指して快活なクラブであり続けたいと願いつつ、挨拶とさせていただきます。

50周年によせて



第1回全日本デモンストレーター
ホテル岩戸屋

館主 宮沢一英

ベルスキークラブ創立50周年大変御目出度う御座居ます。
心からお祝い申し上げます。

先般、初代佐野会長が就任されて2.3年後に燕温泉スキー場と当ホテル岩戸屋をホームゲレンデと常宿として選んで頂き今日に至っているとの事をお聞きして誠に有難く、深く感謝申し上げる次第です。

今は亡き佐野初代会長と共に高原を歩いて登り、新雪に鮮やかなシュプールを描き、それを眺めながら喜びを分かち合い、何回も何回も滑りました事、若い日々の事を今思い出して居ります。

私と同年配で、今年は喜寿を迎えられたのに私より先に亡くなられてしまった事、大変淋しく思っています。心より御冥福をお祈り申し上げます。

さて、此の度日本スキー発祥100周年記念行事が平成23年1月に新潟県上越市に於いて開催される事が決定されました。

実行委員会も設立され着々準備が進んで居りますと同時に、ベルスキークラブのみな様方が半世紀近くも燕温泉スキー場と当ホテル岩戸屋を愛して頂き1シーズンも抜けることなくお越し頂けた事は他に類がなく、その数々の思い出は私の生涯の中でも深く心にきざまれた宝物であります。

スキーの技術的な面においては、昭和5年ハンネス・シュナイダー教師により日本にアールベルグスキー技術が伝えられ、当地はこの技術を受け入れて来ましたが、その後、オーストリア国立スキー学校長クルッケンハウザー教授が来日するにあたって日本の技術がどの程度であるか視察するために、ノイマイヤーとシュワルツェン・バッファーの二人が派遣されましたが偶然にも燕温泉と当ホテル岩戸屋に宿泊し、燕温泉スキー場で講習会が行なわれました。

この技術はバインシュプールテクニク(前外向傾スタイル)であり、私共が最初のデモンストレーターに選ばれ、各スキー場へ広まって行きました。

今でもこのテクニクが主流となって居ります。

勿論、ベルスキークラブのみな様方も一生懸命にこの新しいテクニクを練習され、指導者

となられた方が多々おられますが、食事の時間もけずってまで熱心に練習されていた事を想い出します。

私も初代佐野会長から現小泉会長まで、ベルスキークラブの皆様と共に本当に楽しくスキー人生を過ごさせて頂きました。

時代の流れと変遷により燕温泉も大きく変化しつつありますが、この荒波にくじける事なく私共一同、みな様方を心からお迎えする気持ちを一層強く持って行きたいと思って居ります。

今回の50周年記念が再度の出発となり、100周年に向かって益々御発展されます事を御記念して居ります。

Schi Heil! シーハイル!

「ベルスキースクールの思い出」

燕アルペンスキー学校

講師 相澤常雄

ベルスキークラブの皆様50周年おめでとうございます。

昭和44年11月半ば過ぎの立山スキーに参加させていただきました。

山に入る時は美女平からバスで入りました。楽しい合宿も終わった夜から風雪になり、山を下りる事ができなくなり、2日間外に出ず、我慢出来ずに下りようと千国君と鷺沢さんと妻と自分と4人で下り始めました。ガスと白一色の世界で数メートルの視界と顔にあたる雪が融け凍り付く痛さです。

3千メートルの山の風は地吹雪そのもので、2、3歩進んで足跡を見ても風で消され、小屋から3百メートル進んだと思います。「引き返そうと」言っていた時に1時間近く前に下り始めたクラブ員の人と会い、彼は「どう歩いたかわからない、会えてよかった」と一言。5人で小屋へ戻り、11月末になると小屋も閉めるので食料も少なく、缶ビールも「終わりです」と出されたそのなんと錆くさいビールの味。

3日間待った甲斐があり、快晴になり帰りはバス道路を滑って下りました。引き返すことの勇気の大事さを思い出します。

燕スキー場でのエピソード…3月のスクールだったと思います。3月になると昼間は暖かくなるので雪面も融け、夜は冷え込むので雪面が2、3センチ凍り、そっと歩いて、もぐらない位の硬さの上に新雪が4、5センチ積もって山全体滑れる最高のコンディション。ゲレンデの右より順次滑り下で自分のシュプールを見て皆楽しんでいました。いつも新雪を滑る林の間は格別です。林の間を滑っているときに転倒し足を斜面の上に”バタバダ”してふざけているのかと皆思っていた所、しばらくしてスキーを交に振り始め、近くの人が「頭が刺さっている」と騒ぎ、大変だと急いで引っ張り出した時には顔色が青く、遅れていたら大変な事になるところでした。本人も「早く出してくれないの」とむくれていました。だんだんと顔色も良くなり笑い事ですんで”ホッ”としました。名前は定かではないですが、御本人さん「ゴメンナサイ」他にもありますがクラブ員の皆様、役員の皆様いろいろお世話になりました。

年々滑る日数も少なくなりますが、足腰が元気なうちは滑ります。スキー場で見かけましたら声をかけて下さい。

最後になりますが佐野前々会長さんのご冥福お祈り申し上げます。

50周年のお祝い

燕アルペンスキー学校

講師 作田 守
(丹羽 守)

ベルスキークラブ50周年おめでとうございます。

今、思えば、当時まだ右も左もわからない、若僧の私を、一人前に扱っていただき、本当にありがとうございました。

僕にとって燕温泉スキー学校は、青春でもあり、人生の勉強の場でもありました。

現代的に考えれば、スキー場の大学生アルバイトに過ぎませんが、当時20歳そこそこだった私にとって、燕温泉は道場であり、きびしいスキー部クラブ活動の延長でした。

そんな、厳しい環境下で、真剣にスキーに取り組んだ甲斐があり、準指導員、指導員、そして何より東京都のデモンストレーターになれたことは、社会に出てからの自信につながり、人生の大きなプラスになりました。

当時の燕温泉の1月は、毎年東京都高体連の大会が開催され、大勢の高校生でにぎわいました。その高体連も帰り、燕の静けさが戻り、一息ついたころ、雪深い燕温泉へやってくるのが、ベルスキーでした。

昔のことで、何回ご一緒させていただいたか忘れてしまいましたが、いろいろな思い出の中でも、特に強く思い出に残っているのが、ベルスキーの帽子をいただいた事です。駆け出しだった僕にとって、すごく嬉しかったことを思い出します。

おかげさまで、僕ももう55歳になりますが、スキー仲間であるベルスキーの皆様から教えられた事や燕での経験が社会人としての自分や仕事に生かされていることを感じます。

今年から燕温泉スキー場のリフトが廃止してしまったことは残念ですが、それによってまた違った魅力もありそうです。

2008年2月に燕温泉で皆様とお会い出来る事が楽しみです。

今回は、お誘いいただきありがとうございました。

ベルスキークラブ創設50周年に向けて

燕温泉スキークラブ

燕アルペンスキー学校 迷指導員 木元 実

ベルスキークラブ創設50周年、誠におめでとうございます。小泉会長より記念誌への寄稿を依頼され、私ごときがとも思いましたが、公私共に大変お世話になっている同クラブの節目の年に、これまでお世話になった皆様方へのお礼の気持ちを込めて失礼させていただくことといたしました。

私にとってベルスキークラブは、燕アルペンでスキーを勉強させていただいた時間の中でも大きな意味を持ったスキークラブです。スキー学校のスタッフとして1級を再度受験し、合格させていただいたのもこのクラブの検定会だった記憶があります。また、丹羽先生と一緒に、当時は流行の最先端であったであろうグレーのデサントのユニフォームを着て開校式に望んだことも誇らしい思い出です。当時のベルスキーの上級班は、丹羽先生専属で第二ゲレンデの深雪を、関西人とは思えないテクニックでスイスイと滑つておられ、自分も早くあのレベルまで到達したいものだと思っておりました。また、そのころの燕温泉は、本当に雪が多く、毎日のレッスンがゲレンデ作りからスタートといったイメージが強く、生徒さんたちとやっとなったゲレンデで、さてこれからレッスン…とっていると赤いスキーウエアを着たもみ上げのあるひとが「やー、みなさん！それではトレーニングを始めましょう。」、「木元君、あなたの滑りはリュックラゲだ!!」などと言い残して颯爽と去っていくといった貴重な体験？がたくさんありました。本当にクラブの皆さんは練習熱心で、よく滑り、よく登り、よく飲んだ？私にとっても大変すばらしい経験をさせていただいた貴重な時期であったと思っております。ベルスキークラブの皆様方に深く感謝申し上げます。

例年の小雪やスキースポーツの多様化などスキーを取り巻く環境がめまぐるしく変化してゆく中で、長きに渡ってスキーを愛し、すばらしい活動を続けておられるクラブの皆様から心から敬意を表するとともに、現役クラブ員を側面からしっかりとサポートされている西林前会長さん以下ベルファミリーの皆さんの、今後ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

皆様方とはじめてお会いした当時に比べれば、年もとり、ずいぶんとおとなしくなった私ですが、皆さん同様燕を深く愛し、スキーを愛する仲間の一人として、今後も末永くお付き合いいただくようお願い申し上げます。クラブ設立50周年のお祝いの言葉といたします。

50周年にあたり



ベルスキークラブ

2代目会長 藪口孝一

ベルスキークラブ結成 五十周年おめでとう。

ベルスキークラブ会員の皆様、クラブ結成五十周年を心よりお喜び申し上げます。

私も大阪北電話局に入社以来、初代会長佐野様と藤木さん、両先輩に誘われて入会し、スキーを始め50年になります。

第1回のスキースクールを志賀高原発哺温泉ブナ平スキー場にて開催し、以降は妙高高原燕温泉へ。

当時は夜行列車で燕へ、車中、他のお客とスキーの話…「どちらまで」と聞かれ、燕と答えるど”一目”置かれたものです。

早朝に田口駅（現妙高高原駅）を降りると駅前の桜屋さんで朝食をとり、バスか馬ソリで赤倉ヘリフトは1基、森永ヒュッテまで。

後は、燕まで重いリュックとスキー板を担いで新雪をラッセルしながら関見トンネルへ（木製）トンネルの入口が雪で埋まっている事もあり…。燕にやっとの思いで着けば昼。

夜には宿の廊下に雪の舞い込む事もしばしば有りました。

毎年1月と3月に燕へ。3月には燕アルペンスキー学校に入り、スキーの道場で学び宮沢一英先生・中村屋（花文）の主人・植木毅（針村屋）大先生のもとで雪と戯れ、昭和35年3月21日に1級に合格。以降、この雪深い山奥へ何が良くて通ったのか…。

時には豪雪のため帰れなくなり会社へ電報を”吹雪帰れぬ年休頼む、課長頑張れ金送れ”と打ったことも有りました。

良き先輩、良き後輩に引かれ燕参り、雪も良し、指導者も良し、宿の人も温泉も。また、晴天になれば真っ青な空に山の稜線が浮かび上がり、夜にはスキーの疲れを温泉が癒してくれました。

帰りには上級者は初心者の荷物背負い七曲がりを下り、渓谷沿いに関温泉を通り関山駅まで滑り降りたものです。

駅前の庄司さんで着替えと食事をとり汽車に……。

燕参りする事50年、よくぞここまで来たものです。

一昨年は念願であった孫と一緒にスキーすることが出来、親に感謝、先輩、後輩に感謝。これからも仲間と共に、古に取った杵柄今だ忘れず雪煙。

残念なことは昨年リフトが閉鎖になり、燕のゲレンデでスキーが出来なくなったことです。

シーハイル!!

祝50周年



ベルスキークラブ
3代目会長 西 林 英 幸

ベルスキークラブ創立50周年おめでとうございます。

50周年と聞いたとき、35年もの長きにわたりお世話になった者としては感無量の面持ちがするとともに様々な思い出がパノラマのように頭の中を駆け巡りました。

昭和41年1月、夜行列車にゆられ赤倉からリフトを2本乗り継ぎ、スキー板とリュックを背負い腰まで雪に浸かったまま赤倉トンネルから歩き、体中湯気をあげながら到着したスキー場はまるで別世界。いくら手で握っても固まらない雪、頭から突っ込み、足だけ雪の上でバタバタなど、漫画でしか見たことがなかったことが目の前で起こっていることに驚いたものです。先輩に聞いてはいましたが、スキー界で大変著名な方（宮沢先生）に玄関先で迎えていただいたことにさらに感動です。

当時の恒例行事として印象深いことは『一級合格祝い』と称し、帰り道リュックを3個、体につけられ関山駅までの10kmを、こけつまろびつ滑った事は、鮮明に覚えております。また奈良県から兵庫県スキー連盟へ移籍し、新たな指導員の誕生を願い受験するも誰一人受からず、宮澤先生をガッカリさせ、受験者からダメでしたという電話があるたびに涙しながら、力もコネもない自分のふがいなさを感じ、この時は会長など辞めたいと何度も思いました。そんなおり何回もチャレンジし不屈の闘志で準指導員に合格されたのが現在の小泉会長であり、また彼が数年後の指導員検定受験の最後の種目スタート時、ゴーグルをつける際に《何も言わずに永年スキーをさせてくれた妻のことなどが浮かび滲んだ涙で前が見えなくなった》との話を聞いたときは泣けたものです。以降沢山の指導員が誕生し、検定講習会を中心に基礎スキーをこよなく愛する誇り高いクラブに在籍できたことを心から喜んでおります。

このように汗と涙と喜びを礎に燕温泉でスキーの腕を磨き、新雪を蹴立てて？疲れは温泉で癒し、夜は楽しいお酒とミーティングという合宿が続いていましたが、忘れもしない1995年1月17日、早朝5時40分くらいに神戸駅へ到着するシュプール号を利用するべく準備をしていたところ、たしか当時クラブの理事長であった小泉君の提案で帰りを16日の夜中につくように変更したことにより、あの震災に神戸駅で遭遇しなかったことは感慨深いものがあります。後のテレビの映像でスキーとリュックが散乱している神戸駅を見たときの衝撃を表現することは出来ません。

数日後、大阪の女性クラブ員から「被害を受けた方一人や二人でしたら私の家へ来てください」との心温まる言葉をいただいた時は、本当に有難かったし、家の壊れた方はいても怪我をしたクラブ員はいないと風のたよりで聞いて安堵することが精一杯でした。

このようにエピソード、思い出を書けば枚挙にいとまがありませんが、お世話になった宮沢先生と燕スキースクールの大勢のコーチ諸氏、「ありがとうございました!」としかお礼の言葉が浮びません。

また、クラブの創設者で初代会長を務められた佐野常泰氏が急逝され50周年の楽しい歓談が出来ないことが唯一悔やまれます。

どうかこの記念誌を佐野さんの奥さんへも届けていただき、ベルスキークラブが50周年を立派に迎えましたよ!と報告をよろしくお願致します。

最後に月並みではありますがクラブの今後の発展を願いながら・・・シーハイル

クラブ50年の“歩み”

年 代 歩 み

1958年 (昭和33年) クラブ結成 初代会長 佐野常泰

1960年 (昭和35年) 第1回スキースクール開催 (志賀高原・発哺温泉にて)

1964年 1月 (昭和39年) 第2回スキースクール (燕アルペンスキー学校に入校)

・11月の立山に始まり 5月の立山で終る

<第7回スキースクールしおり>より

ごあいさつ

全日本スキー連盟奈良県連常任理事
全日本スキー連盟準指導員
バルスキークラブ会長

佐野常泰

新雪おめでとうございます。

今シーズンも初雪を求めてクラブ員14名(女子5名)と11日の連休に立山へ出かけました。例年にならぬ雪量で、弘法小屋のあたりから重いリュックとスキーを担ぎ、6時間かかって地獄谷の雷鳥荘にやっと辿りつきました。11月の立山も年々スキーヤーが増加して山小屋もすし詰めで、8畳の部屋に15名寝かされました。リュックも何もかも入れてだから1人あたり半畳もないのです。寝るのに苦労しました。スキーのほうは雪質もよく天候にも恵まれて、クラブ員も年々うまくなってまいりました。スキーが上手になるには、スキー技術を力学的に正しく理解して、上達者のまねをするのが一番の近道だと思う。ただそれを体得して個性を加味し、自分の技術にすればよいと私は考えています。

今回参加される皆様、怪我なく、楽しみながら上手になれるように、今からトレーニングに励んでください。では、お会いする日まで、お元気で。 シーハイル!

・2代目会長に藪口孝一

・夜行列車から貸切バスにて燕温泉へ (第11回スキースクール)

・12月の志賀高原に始まり 3月の志賀高原で終る

1978年 (昭和53年) 奈良県スキー連盟より兵庫県スキー連盟へクラブ移籍する



・ 3代目会長に西林英幸

1982年1月（昭和57年） 第20回燕スキースクール〈89名〉

1986年1月（昭和61年） 第24回スキースクールよりバッヂテストをベルスキークラブで開始

1990年1月（平成2年） 第28回ベルスキースクールよりリフト会社が国土計画になる〈65名〉

・ 第29回ベルスキースクール～ 現地参加者が増え、親子二代での
参加の時代に〈71名〉

1992年1月（平成4年） 第30回ベルスキースクール



1993年1月（平成5年） 第31回ベルスキースクールよりバッチテスト受験班すべて
クラブ員で講師を担当〈84名〉

・貸切バスからシュプール号にて燕温泉へ（第31回）

・第33回ベルスキースクール～ 燕温泉に早朝6時半に到着、暗いうちに
岩戸屋に着くのは初めての事〈73名〉

・第35回ベルスキースクール～ 現地3泊者と4泊者（残留組）で開催〈53名〉

1998年1月（平成10年） 第36回ベルスキースクールより主任講師のローテーションを開始

・第37回ベルスキースクール～ 18年ぶりの大雪となる〈50名〉



2000年2月（平成12年） 祝日法の改正によりベルスキースクールが38回目にして2月開催となる
〈33名〉

- ・ 4代目会長に小泉章五

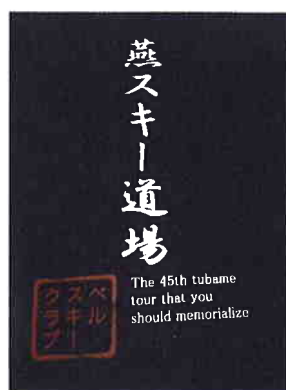
2002年1月（平成14年） 第40回ベルスキースクール

- ・ 40回記念行事としてカナダツアー実施



- ・ 第42回ベルスキースクール～ 燕よりの帰路、特急列車の遅れにより直江津駅にて立ち往生となる 〈35名〉

- ・ 第45回ベルスキースクール～ 燕リフト停止となり、赤倉温泉スキー場にて講習、検定会の実施 〈29名〉



2008年（平成20年） クラブ結成50周年





白樺哀歌

ちりめん沢 パラリとちった
花のお山は 妙高山
白銀輝く 新雪けそ
腕をみかいた 燕山
五尺余りの 小さな体
六尺以上の スキーをほして
會はコブ斜 明日は深雪
雪にまみれた おいらだけれど
たった一夜の 恋をした
まぶしい娘
山をおうて カタギになれと
そんなあの娘の やさしい言葉
スキー 液世の この俺らや
所詮 はかなき 悲しい夢と
なっていくる な可愛いなよ
止めてくれる な おっかん



一 人里離れた山奥に
この世の地獄があったとは
夢にも 知らなかつたバの人
知らなかつた俺らが 教えますよ
二 長いリフトに乗せられて
重いリュックを肩に掛け
長い坂道登ったら
ついた所は 燕山

三 身から出ましたサビゆえに
内傾外向とどなられて
つてて 帰った白樺の心は
恍惚か夢のあと
四 校長先生にやとやされて
主任講師にやコケにされ
靴をぬらした事もある
こゝが地獄の 一丁目
五 早く帰れとあの娘から
長い手紙が やって来た
帰りに帰れぬこのおいら
スキー 液世にや義理がある
六 むこう通ちは 信越線
みれに乗ったら 帰れますよ
帰れば オイラの 名がまだ
春が来るの ひとつのこと
七 とうとう春になりました
それでは 皆さん サヨウナラ
おわり名古屋は 城でもつ
燕の 温もり 俺でもつ

「スキーとわたし」

ベルスキークラブ

帆足 真由美

ベルスキークラブ50周年という節目の1ページに、たまたま指導員検定を受検するとあって、原稿を書くこととなってしまいました。それでなくても、この3年間というのは年々滑走日数も減り、準指受検のときに猛勉強した学科もすっかり忘れてしまって、さらに夏場の体力づくりも全然出来ておらず、今シーズンの指導員受検を向かえるプレッシャーはずっしりと重いというのに、どうしよう…。

いろいろ考えた結果、ベルスキークラブとの出会いなどをお話してみようと思います。わたしがベルと出会ったのは、もう15年以上も前のこと。映画「私をスキーに連れてって」ブームにのり、スキーが全盛期のころです。

そのころ、スキーは年に2～3回、信州方面へ連れて行ってもらっていたのですが、とある先輩に「燕温泉という雪深いところで4日間こもってみない？」と誘われたのがきっかけです。

「そこは宿も5件ほどの山奥で、宿に行くまでに荷物をもって雪道を歩いていくし、行ったらスキーして温泉に入るしかすることがないよ。」なんてことを言われたのですが、逆にその言葉に興味をもってしまったのです。荷物は自分で運ぶことはなかったですが、赤倉温泉からリフトに乗り、そこから雪道を歩いて宿に行きました。

そこで初めてのレッスンを受け、4日間レッスン三昧。すっかりのめり込こんでしまい、わたしのスキー修行の道が始まりました。

もともと運動オンチのわたしは、やはり、なかなか上達はしませんでした。山の空気とキラキラする白の世界、山から見下ろす景色がとても好きで、まともに滑れないのに、どんどん頂上まで行ったものでした。

転ぶときは派手で、顔からまともに落ちていくこともしばしば。それでも、大きな怪我をすることもなく、今日に至っています。

これも、ベルで安全に上達するよう指導いただいたお陰だと思っています。

今はわたしも指導者のはしくれとなり、逆に伝えていく立場となりました。

そして、今シーズン、正指導員を受検します。

先日、受検のための学科研修があり、その中で講師が言われていたことで、印象に残っていることがあります。

技術向上のため目標を定め、日夜、上達のために練習に励み、資格取得を目指していく。

しかし、いざそれを達成したら、はたと目標を見失い、今までやってきたことで十分満足とな

り、だんだんスキーから遠ざかってしまう人がいるという。いわゆる燃え尽き症候群だそうです。

ふと自分を振り返ってみると、準指をとってから、家の事情や職場などが変わり、情熱から冷めてしまいそうになっていたかもしれません。

ベルに入って間もない頃、自然の美しさや滑る醍醐味、旅の楽しさなどに心を奪われ”一生スキーヤーでいよう”と思ったとおり、これからも、肩肘張らずに自分なりのスタイルで、スキーを通じて人生を楽しんでいければと思います。



お祝いのことば

ベルスキークラブ

大串仁司

私がベルスキークラブ(以下「ベル」といいます。)、或いはベルの人達と出会ったのは、人づてでもなくスキー場でもない、インターネット上のホームページです。

私の故郷は京都府の福知山市。雪は降りますがスキー場はありません。今は亡き母親が、私が小学生の頃、隣町・夜久野町(平成18年1月1日、福知山市と合併)の現世スキー場に連れて行ってくれたことがきっかけでスキーを始めました。

学生の頃は、よく滑って年間10日程度。それ以来、全く我流に近いスキーをしていました。25歳・結婚した年の冬、当時1級を取得していた後輩と行った梅池スキー場で、たまたま、いわゆる「居候検定」にもぐりこませてもらって2級に合格したことが、少し真剣にスキーに取り組むきっかけとなりました。

1級はその2年後に合格したものの、テクニカルにはなかなか合格できませんでした。体力も落ちてスキーを全く履かないシーズンも経験し、私のスキー人生もこれまでかなと思った時期もありました。35歳くらいのことでしょうか。その頃、体力的にも自信がなく弱気になっていました。高校の時の一つ先輩で、今に至るまでのスキーの師匠である人に、「もう、スキーも適当でいいですわ。」とか、そんな言葉を吐いた記憶があります。

その時、先輩から、「お前、スキーくらいしかできへんのやから、スキー止めたら人生終わってしまうで。」とキツイことを言われました(当たってますけど…)。

その言葉で、もう一回スキーを頑張ってみようと思いました。

そこで、家庭・仕事の事情で氷上町(現丹波市)から現在住んでいる三田市に転居してすぐ、兵庫県のスキークラブを探そうと決意したのです。

ところが、探そうにも私には兵庫のスキークラブに関する情報が全くありませんでしたし、人に聞くにも兵庫県のスキーヤーに知り合いは皆無でした。

そうだ、インターネットで探すとするか!

ホームページを開設しているクラブをこまめに調べ、何とか私の勘で自分に合いそうなクラブ二つに絞って、勇気を持って接触することに決めました。

まず、一つ目のクラブにメールを送り、近くにお住まいの指導員の方とお会いしました。お話を聞くと、いいクラブではあるのですが、行事の参加率もいい方ではなく、また、籍のみを置くスキーヤーが多く、余りにも個人主義的と感じました。余り束縛されるのも窮屈ですが、せっかくの所属クラブの行事が特定の人だけの集まりではクラブの意味がないと感じ、加入を遠慮させていただくことにしたのです。

二つ目に接触を試みたのがベルです。早速、メールを送りシーズン初めの奥神鍋の人工雪でベルの数人と一緒に滑り、お話をする機会を持つていただきました。主にお話を聞かせていただいたのは、現在中心となって活躍されている指導員の一人Fさん。お話を聞くと、かなり僕の考えているペースと合いそうなクラブと感じたので、即加入を決めました。

その後、氷ノ山合宿、テクニカルキャンプなどを経て、徐々にクラブ員の方に溶け込んでいくことができました。

そして、加入2年目で、伝統ある燕ツアーに小学4年生の息子と一緒に参加することに。余談ですが、数年ぶりの豪雪の年、今は閉鎖された燕温泉スキー場の最後のシーズンに滑ることができました。車で宿に近づくこともできなかったことが強く記憶に残っています。ベルは、あの秘境の地に、数十年前から伝統的にツアーを組んでいたとのこと。交通の不便な時期になぜ燕温泉だったのか、私には知る由もありませんが、あの温泉を一度味わったら、再び湯に浸かりたくなることは間違いありません。

インターネットを介したベルの新入生は、私が入会した頃から増えつつあるようです。以前はクラブ員の紹介でしかクラブに入る手段はなかったようですが、これも時代の流れなのでしょう。

長い間ベルの歴史と共に歩いてこられている方々にとっては、どこの馬の骨か分からない輩が、ポッとクラブに入ってくることに違和感があったことと思います。

しかし、クラブ総会・氷ノ山合宿・燕ツアーなどで、ベルの先輩の方々と接する機会が幾度となくあり、ベルのネット新入生と相互の理解が生まれていったと（勝手に）思っています。そして、何かと出しゃばりの私は、ベルに加入させていただいて2年目くらいから、新入会員の方のみならず、ベルの先輩方からも、「君は何年も前からベルにいるみたい。」と言われることもしばしば。自分では遠慮がちに過ごしているつもりでも、そうは映らないみたいです。ちょっと反省しました。きっと、色んなことに口出しをしたり、勝手に行事を企画してみたり、気ままな性格と自由な言動のせいでしょう（これは治らないかもです。）。

私こと、ベルに入会させていただき、沢山の仲間と知り合ってから、自分自身も色々な新しいことに挑戦することができ、以前よりも増して前向きな人生を送れています。スキーについては、ベル加入後に念願のテクニカルに合格し、昨シーズンは2度目の挑戦で、準指導員にも合格させていただきました。

今年、ベルに籍を置かせていただいてから、4シーズン目を迎えることになりましたが、私は、心から最高のスキークラブに出会ったと感じています。そして、ベル創立50周年の年に在籍させていただいていることを光栄に思います。さらに、まだまだ新参の私に、創立50周年の記念に寄稿させていただく機会をいただいたことに感謝しています。

最後になりましたが、ベルを立ち上げられた先輩方、その後、現在までベルを愛し存続してこられた先輩方及び「ベルスキークラブ」に、「50周年・おめでとうございます!ベルスキークラブ、万歳!!」。

いつまでも、ベルが輝くスキークラブでありますように。

創立50周年記念誌

発行 ベルスキークラブ

発行日 平成20年1月15日

発行人 小泉章五

印刷所 林写真工業株式会社

〒651-0085 神戸市中央区八幡通4丁目1-9
